

カシンの部屋 一中国で活躍する卒業生に聞く一



はじめに：

一橋大学は日本の社会科学研究・教育をリードする大学として、「アジアのハーバード」と呼ばれている。「Captains of Industry」の養成を目指して、経験豊富な優秀な教授陣を擁し、ゼミナールを核とする少人数精鋭教育によって、学生が日々新たな発見と感動を得られる教育を実践し、批判的思考力及び創造的思考力を持ち、国際的視野を備え、広く経済社会に貢献できる人材を育成している。母校を支えている同窓会「如水会」は、1914年11月に設立され、一橋大学の設立にも深く関わり、「日本資本主義の父」ともいわれる渋沢栄一が、中国礼記の「君子の交わりは淡きこと水の如し」から命名しました。如水会は国内外137ヶ所に支部を擁し、核地域・国で活躍している。

質の高いグローバル人材の育成を目指している中、大学はアジア、ヨーロッパ、北米、中南米、オセアニア、アフリカなどから793名の留学生が在籍し、日本から海外へも、短期海外留学、短期海外語学留学、海外調査、長期海外留学など多様な海外留学プログラムを備えている。

2004年8月、一橋大学初の海外拠点として北京市建国門外に、一橋大学北京事務所が設置された。中国の清華大学、北京大学、中国人民大学、中国社会科学院など9校の名門大学・機関と交流協定を結び、4校とは学生交流協定も結んでいる。中国の大学とは各種シンポジウムや、セミナーを開催、2016年には新たにグローバル大学連携としてスタートした「SIMGA」に加わった。

一橋大学と中国の縁は、「如水会」の命名以来と言えるが、歴代卒業生の貢献で保っているとも言える。1972年、当時の大平正芳外務大臣（後総理、1936年一橋大学経済学部卒）は田中角栄首相と共に中国を訪問、正式に日中国交正常化をスタートして以来、卒業生たちは中国との縁を継承し、大事に保ってきている。

今回、中国で活躍している卒業生へのインタビューを通じて、中国という国のこと、生活や仕事環境、今の中国を知ることの意味等、様々な角度で中国を語っていただき、また、中国の方には、新たな角度で一橋大学を知っていただきたいということで、本企画をスタートすることにしました。

第1回目は、丸紅中国の鳥居敬三氏です。（※インタビュー当時）

2018年1月24日実施

鳥居 敬三氏

1979年一橋大学商学部卒

丸紅株式会社常務執行役員、中国総代表、丸紅中国会社社長

1858年に創業した丸紅は160年の歴史を有し、日本の五大総合商社の一つである。

カシ：中国に来てどのくらいですか？昨年6月に、中国日本商会主催の「走近日企・感受日本」第20回訪日団帰国報告会に、鳥居さんは日本商会を代表して、この活動を継続したいとご挨拶されました。中国日本商会は中国青年を日本へ招くという交流活動を事業として実施する理由は何でしょうか？



鳥居：2016年4月に中国に来て2年経ちました。

このプログラムは日本企業のサポートによるもので、日中相互理解を促進するために、2007年、中国日本商会が中国人民対外友好協会と協力して立ち上げました。年2回実施しているので、2017年は事業開始10周年となり、6月に第20回を行いました。中国の名門大学から30人余りが訪日、日本企業見学、最新技術体験、日本文化体験、ホームステイ等、短期間ですが日本を満喫してもらうプログラムです。我々は「走近日企・感受日本」を通じて、若い中国青年たちに、日本社会、経済、文化などを知ってもらい、両国の交流と信頼関係を深め、日中両国の長期的な隣国土の友好関係を構築したいと思います。

私は今回、日本商会社会貢献委員会の委員長として、訪問学生の帰国報告会に参加しました。日本に触れた後の学生たちは、日本企業、教育、文化を直感的に学んで帰国しており、行ってよかったとの感触が多かったと思います。

カシ：一橋大学も第20回「走近日企・感受日本」の訪問大学対象校として参加しました。訪問学生は、ヨーロッパ風のキャンパス、緻密な研究、勉強への熱意ある学生等、印象的だったようで、一橋大学に憧れ、留学したいと言う学生もいました。ところで、鳥居さんはなぜ一橋大学を選んだのですか？

鳥居：中学校の時に、「どんな人になりたい」というテーマの作文を書いたことがあります。うちの家庭は海外に無縁だったので、外国に行ったこともなかったし、小さい時から、自分のパスポートを持ち、海外に行ってみたいという気持ちがありました。当時、商社は海外に行く可能性が一番高い業界でした。今は、銀行も、製造業も海外に行けるようになりましたが、当時は、海外駐在というと、商社の確率が高い。そして中学生の時作文に、商社マンになりたいと書きました。日本では毎年、新卒はどんな会社に入ったとか、どんな大学の学生がどこに入ったかという調査があり、それを参考にして、一橋大学に入ったら商社に入る確率が、東大や他の大学より高いと思い、一橋大学に入ると商社に入ると勝手に思い込んで、一橋大学を志望しました。1975年に一橋大学商学部に入って、1979年に、今の会社、日本の丸紅に入社しました。当時、新卒は120人前後で、一橋大学出身者は24人も占めました。

カシ：一橋大学に合格した後、どんな 4 年間で過ごしたのでしょうか？

鳥居：海外に行ってみたい、商社で働きたいということが一橋大学に入った原動力ですので、大学の 4 年間はこの目標を目指して過ごしました。

商社は物を作る会社ではなく、人と人との関係で、仕事をしていくところです。それは、日本人同士、中国人、イスラム教の方、アフリカの方かもしれないし、どんな人に対しても、普通に会話ができて、それには当然英語力が必要ですが、どんな人に対しても、この人は嫌だけど、こっちの人はいいという、こういう人間ではなかなか成功しない、やっぱり、人と人の付き合いが重要ですから好き嫌いを自分で決めてはいけません。それから、お酒、強くないとね。いつもみんなに言っていることだけど、ビジネスやるには、オプション（選択肢）を自分で持っている方が強い。例えば、お酒飲める人は、飲めないふりができる、お酒飲めない人は、飲めるふりはできません。ゴルフ、上手い人は下手のふりができますね、「あ、いけない、失敗しちゃった」、本当はもっと上手くてね。でも、下手な人は逆にできない。カラオケも、下手な人は上手く歌えない、上手く歌える人は、下手に歌うことができる。すべて、できるようにしておけば、できないふりをするという選択肢があるので、その分有利になるということ。言ってみれば、大学の 4 年間は全て、社会に出た時に身を助ける技術に取り組みました。勉強以外に一番努力したのはその部分です。



一橋大学は日本で最も伝統のある社会科学の大学です。学生がそれぞれ所属する学部が開設する科目だけでなく、所属学部以外の各学部の開設科目を自由に履修することができます。ゼミは、私は商学部でしたが、2 年生の時から入れる社会学部の南博先生の心理学ゼミを選びました。「夢判断」という社会心理学分野の授業で、夢の内容からその人の性格や抱えている悩みなどを推測する学問です。南教授のゼミを通じて、人と人の付き合い方も理解することができました。サークル活動もやりました。4 年間アイスホッケー部に所属していました。徹夜で練習したこともあります。

カシ：すごく目標がはっきりしていますね。当時、留学生は多かったですか？海外に行くチャンスはどうでしたか？直近のデータによりますと、一橋大学の留学生比率が 12%となり、そのうち中国人学生は 40%近く占めています。逆に、如水会からの海外留学奨学金を利用したりして様々な留学ができるのに、中国に来る学生がそんなに多くありません。学生時代に中国に来ることに対して、どう思われますか？

鳥居：当時、クラス 40 人の中で、女性は 2 人しかいなかったと記憶しています。うちのクラスには留学生がいなかったけど、他のクラスにはいたかもしれないです。学部生 800 人のうち、女性が 5%を占め、留学生は 10 人前後いたと思います。その後、何かをきっかけに留学生が急に増加し始めたと聞いています。女性の人数が増え始めたのは 21 世紀に入ってからだと思います。留学生比率が 12%を上回って、様々な海外留学プログラムを備えた今と比べ、私の大学時代は、留学生も少ないし、海外に行くチャンスも少なかった。

中国に来ないと、中国の本当の姿を皆知らないと思います。中国で起きているデジタル革命が日本のニュースで報道されますが、報道された部分はほんの一部、実際に来て、見てみると、わからないところが沢山あります。例えば、シェア自転車とか、スタートアップ企業はどういう仕事しているとか、深セン（地名）は昔農村だったのに、今は丸ノ内のように、ビルが沢山立っている。それから、道に座っている物乞いの人も、QR コードでお金をもらっているとか、焼き芋一つも“WeChat”で買えるとか、こんなの見たら、皆びっくりすると思います。日本人の若者が必ず持っているのに、中国の若者が持っていないものが 4 つあります。

なんだと思いますか？まず、現金は持っていない、クレジットカードも、“WeChat”があれば電子決済できるから。従って、財布は持っていません。あと、名刺ですね。“WeChat”で友達になれば、個人データの交換も即OK。名刺を失くしたりすることもないわけです。

こういう事を知らないと、中国語習いたい人は別にして、中国で勉強しても、将来にどう役立つのか分からないと言って、それで中国に来ないのだと思います。ご覧の通り、北京の空気もきれいになっている。本当の中国で何が起きているのか、「一带一路」も、中国だけではなく、中国が色々な国に影響を及ぼしていて、これを見ていないと、世界が分からなくなる。中国人は「いい加減」という部分は、逆に言えば意思決定が早いということです。要するに、大丈夫だと確信が得られる前に、行動に移す、こういうところが経済が活性している根源だと思います。これからますます中国は無視できない存在となりますので、これからは、中国を知らずして、ビジネスの世界で生きていけないというぐらいのことを中学生の生徒にも伝えるべきだと思います。

結局、人間は、本を読むよりも、見たほうがよく分かります。

カシ：おっしゃる通りで、中国は今、「大衆による起業、民衆によるイノベーション」の時代に直面しています。科学技術開発に力を入れるだけではなく、社会科学分野の人材の育成と配置も大切にする必要があると思われませんか？一橋大学留学生の40%は中国人学生で、近年、中国で就職する学生も以前より増える傾向があります。一橋大学で得た学識を元に日本や中国で活躍することが期待されています。

鳥居：一橋大学は日本で誰でも知っている素晴らしい大学だと思います。常に学界をリードしてきたという長い歴史と実績があって、社会科学を中心に広い分野で、新しい問題領域の開拓と解明を推進する豊富な教授陣に恵まれています。日本の各地から優秀な学生が集まり、学部生からゼミが始まって、ゼミを軸として、学生が日々あらたな発見と感動を得られる。

如水会の協力のもと、学生の総合的キャリア形成を支援する教育の一環として開講した「如水ゼミ」があり、産業界などの第一線で活躍しているビジネスリーダーと学生との対話を中心としたゼミであります。私は商社なので、3年間商社ゼミを担当しました。ゼミに参加してくれた留学生も沢山居ました。中国人女性とモンゴル人男性が一番優秀だと感じました。質問の内容や、知識の量も日本人学生と全然違います。ゼミが終わって、最後にA、B、C、Dと点数を付けるのですが、Aを取ったのは殆ど中国人女性とモンゴル人男性ですね。中国人男性は理工系が多かったと感じます。中国で就職しやすいと思います。

カシ：中国交流センターの代表の青木人志教授は「中国にいて、世界に出会う」と主張され、一橋生の中国への関心を喚起するため、2016年から「中国を知ろう、中国へ行こう」という連続イベントを開催し、今までに8回も行いました。各回の講演者は中国でのビジネスや、教育の経験が豊富な本学OBや、在学の中国人学生です。これから、中国では、中国人卒業生だけではなく、日本人卒業生も増えると期待しています。将来に対して、お言葉をいただきたいと思います。

鳥居：中国の方は、日本文化、日本のテクノロジーに興味があり、沢山来られました。勉強だけではなく、旅行者も増えていると思います。日本からの留学生も旅行者も増えていないことは、中国を知ろうという動きがあまりない、本当の中国を知らないから来ないのだと思います。日本では、中国を知ろうという環境を作り、中国では、中国版SNS「Wechat」を借りて、一橋大学の動向を発信し、一橋大学を知ってもらう必要もあります。これらは、一橋大学中国交流センターだけではなく、我々如水会メンバーにとっても課題ですね。

カシ：今日本本当にありがとうございました。

